

## 『立正安国論』の領解と社会・人心の浄化運動の推進

三 原 正 資

(広島県妙長寺住職)

これが私に発表せよ、と与えられた主題であります、このことに就きましては、次のように大体三つに区分して、私見を述べさせていたかどうかと思っております。

第一に、今なぜ『立正安国論』を取り上げるのか。第二に、『立正安国論』とは何か。第三に、『立正安国論』から現代を視る。この三つの項目にしたがって、この主題について思うところを述べてまいりたいと思うのであります。

### 一、今なぜ『立正安国論』を取り上げるのか

今年(昭和二十九年)は申し上げる迄もなく、日蓮聖人滅後七〇一年に

当たります。宗祖のことばに、

欽明より当帝にいたるまで七百余年、いまだきかず、

いまだ見ず、南無妙法蓮華経と唱へよと他人をすすめ、

我と唱へたる智人なし。(『撰時抄』定本一〇四八頁)

とあります。欽明十三年(五五二年)、百済王が仏像と経論を我国に献上しましたのが仏教公伝の年とされております。それから七百年経ちました建長五年(一二五三年)、宗祖はいわゆる立教開宗されたのであります。今、祖滅七百年と申しますと、年の隔たりを深く感じるのであります。我が国に仏教が伝来して七百年たった時、宗祖が「立正安国」の仏教を唱導されましたことを考える

ならば、決して長い時が流れたなどとは思わず、宗祖の教えを継承し闡明しなければならぬ、との感を新たにするのであります。

『立正安国論』は申す迄もなく、古来、三大部、五大部の一つに教えられ、宗祖の宗教の骨格を明かすものであります。本論の内容の詳細につきましては、新たに刊行されました『日蓮宗事典』をはじめとする多数の書物を参照していただければ明らかでありますから、ここでは申し述べません。ただ、一、二引用しておきます。

立正安国の四字は日蓮聖人の宗教の使命とするところを最も端的に表現した言葉である。（『日蓮宗事典』四

一六頁）

天災地変・社会不安に対する疑問、その疑問の解決を求めての仏教の再研究、これは日蓮にとって一種の出なおしを意味したといえよう。事実、日蓮の日蓮たる面目は、ここから発揮され、日蓮独自の新仏教運動は、ここから開始される。したがって厳密には、いわゆる立教開宗も、この時点まで下げるべきであろう。（田村

芳朗著『日蓮—殉教の如来使』四二頁）

『立正安国論』が為政者に呈出されたことによつて、日蓮は迫害の渦中に身を置くようになるが、日蓮は次々と襲いかかる危難を、『法華経』に予言された持経者・行者の証しとして悦び、それと正面から対決する行動を介して独自の教義を確立していったのである。このように『立正安国論』は、内的にも外的にも、日蓮の宗教と、それに賭ける生涯を決定する端緒となつた書であるといえる。（今成元昭著『日蓮のこころ』八四頁）

そこで、本日の主題に「立正安国論の領解」とございますが、端的に言うならば、『立正安国論』を領解することは、日蓮聖人の宗教の真実の意図を理解することに他ならないと思うのであります。このことが、『立正安国論』をとり上げることの一つの大事な意味であろうと、私は思うのであります。

次に、久遠成院日親上人の『立正治国論』、あるいは不受不施の問題など、ときの社会を揺り動かした出来事は、その多くが『立正安国論』に端を発するようであります。そこで、日蓮聖人の宗教は『立正安国論』を通じて時代

と密接に関わっているといえると思うのです。今日、日蓮教団が社会に対していかなる姿勢でのぞむかという問題は、『立正安国論』の領解と深く結びついているといえます。

優陀那日輝和尚は『庚戌雜答』のなかで、

立正安国論は当時既に其の用を為さず。いわんや、今世に至って全く其の立論の無実を見る。天下安泰なるは全く武徳に依れり。(充治園全集四卷三七二頁)と述べています。

教団人が『立正安国論』の内容は実際的ではないといつてしまえば、それまでという気持ちになります。けれども、ここに読み取るべきは、徳川幕藩体制のもとでの仏教者の姿でありましょう。現実主義者日輝和尚は徳川三百年の平和は宗教によって齎られたものではなく、武力によって維持されていたとみただけであります。しかし、武力が世界に平和をもたらすのに万能であるかといえば、そうではないでしょう。明治維新以来の我国の歩みをみれば明らかであると思うのであります。戦後、我国のたどった道は経済的繁栄の道であります。まさに、

富、経済力が日本の安全を保証してくれているかのようにです。しかし、これとても充全たるものではないようでありまして、我国の輸出攻勢に対する各国の反発は日増しにひどくなるばかりであります。

そこで、現在の世界の大勢にしたがって、我国は再武装することによって安全を保持する道を選ぶのか、それともそうでない第三の道を選ぶのか、といった岐路わかれみちに現在の日本は立ちつくしている、と私は思うのであります。

現在は、まさにこのような時代でありますから、今回、私どもが『立正安国論』をテーマとして取り上げたことは、まことに時宜に叶ったことである、といえると思います。

以上、今なぜ『立正安国論』を取り上げるのかという問題に対しまして、一つには、『立正安国論』の領解は日蓮聖人の宗教の目的を把握するうえで重要な御書である。二つには、日蓮宗教団としては、混沌とした社会情勢の中で、我国の進むべき道をどのように考えるのか、社会に対していかなる発言をするのか、を決めるためには、『立正安国論』の理解をさけて通ることはできない、と

いう二点を述べたのであります。

## 二、『立正安国論』とは何か

すでに御承知のことと思うのですが、まず『立正安国論』の概要についてふれさせていただきます。『立正安国論』において宗祖は、

うちつづく天変や天飢饉疫癘等をあげられたあと、  
此の世、早く衰へ、其法何ぞ廢れたるや、これ何なる  
禍いに依るや。(定本二〇九頁)

と、問いを起こされ、ついで、

世みな正に背き、人ことごとく悪に帰す。故に善神国  
を捨てて相去り、聖人とところを辞して還らず。これを  
もつて魔來り、鬼來り、災い起こり、難起こる。(定本  
二〇九―三一〇頁)

と断案を下されるのであります。そしていうところの「正に背き、悪に帰す」とはいかなることか、ということについて宗祖は、

後鳥羽院の御宇に法然というもの有り。選択集を作れり。すなわち一代の聖教を破し、遍く十方の衆生を迷

わす。(定本二一四頁)

と述べられ、法然浄土教の流布をもつて、災いの根本原因とされたのであります。このいわゆる謗法に對しまして、宗祖は、

早く天下の静謐を思はば、すべからく国中の謗法を断つべし。(定本二二三頁)

と述べられ、政治権力をもつてこの謗法を処断することを進言したのが『立正安国論』であります。

『立正安国論』についてはいろいろに論じられ、私に加えるべき何ものもない、というのが正直な感想であります。『立正安国論』を読みながら気付いた宗祖のお考え、それは、『立正安国論』というものが生れてきた背景というようなことについて、二、三述べさせていただきます。『立正安国論』とは何かを考えてみたいと思うのであります。

一には、宗祖は政治というものをどのように考えておられたのかということです。『立正安国論』を呈出するという行動は多分に政治性を帯びております。政治に無関心ならば、とても出来ないでありましょう。元來、古代

日本の仏教は鎮護国家の役割をにない、政治色が濃いのであります。けれども、『法華経』の安樂行品を読みますと、

菩薩・摩訶薩、国王・王子・大臣・官長に親近せざれ。あるいは、

樂たのんで人及び經典の過を説かざれ。

とありまして、仏教者の政治的行動には消極的な面をもっております。ゆえに、『寺泊御書』には、時の人が宗祖の行動を、「安樂行品に違す」（定本五一四頁）と云って、批判したという記述があります。

さて、今日、世の中の在り方を決めていっているものは政治である、と私どもの多くは考えているのではないでしょうか。それに比べて、宗教はたかだか社会における一機能を果しているに過ぎない、というのが大多数の人々の感想ではないかと思っております。宗教書もまた、一部の例外を除いて、それで良しと思っております。

しかし、宗祖は政治むきのことを非常に重視されたのであります。そして、逆にいうならば、宗教が政治をも

含む社会の根本にあるとお考えになっていただければこそ、政治は大事と思われていたと、私は理解するわけであります。

宗祖が身延に入れられて間もまく書かれた御消息文に、『智慧亡国御書』と名づけられた一篇があります。その中で宗祖は、

漢土・日本国は仏法已前には三皇五帝三聖等の外経をもて、民の心をとのえて世をば治めしほどに、次第に……（中略）……外経をもつて世をさまざざりしゆへに、やうやく仏経をわたして世間ををさめしかば、

世をだやかかなりき。（定本一一二八頁）

と述べておられます。仏教を「世を治めるもの」としてお考えになっておられるわけであります。また、外経の聖人のことを、

此等は仏法已前なれども、教主積尊の御使として民をたすけしなり。（定本一一三〇頁）

また、

仏と申すは三界の国王・大梵王・第六天の魔王・帝釈・日・月・四天・転輪聖王・諸王の師也、主也、親也。

〔「神国王御書」定本八八一頁〕

と述べられておりますが、これは、政治とか社会を仏教が統一するという世界観を示されたものと思うのであります。宗祖はこのような世界観に立って、『立正安国論』というものを構想されたと考えるのであります。

二には、宗祖は物事を歴史的にみられた、ということ  
です。天台大師の『摩訶止観』五の上に、

如来は、善く知りたまふが故に、遠近みな記す。（岩波  
本上二八二頁）

という文句がございます。同じように、宗祖も經典を「明鏡」、あるいは「未来記」として把えられたのであります。『立正安国論』に諸經の引用が多いのも、そのためでありましょう。

『教機時国鈔』『撰時抄』、それからさきほどの『智慧亡国御書』など、「時」というものをつとりあつた御書を拝見しますと、人間の性質は時代が下るにしたがつて悪くなる、そして仏の弘むべき教えは時代を歴る（か）にしたがつて高度になるべきだ、という宗祖のお考えをうかがうことができるのであります。これらを考えますと、宗

祖は物事を歴史的にみられたといえるのではないか、と思うのであります。

さて、『立正安国論』では、法然浄土教を問題にしておられますが、同様の事例は過去にもあつたということ、宗祖は述べられています。

聊か先例を引て、汝の迷ひを悟すべし。止観の第二に史記を引て云く、……（中略）……又、慈覚大師の大唐巡礼記を案ずるに云く、……（中略）……此を以て之を惟ふに、法然是後鳥羽院の御宇建仁年中の者なり。彼の院の御事既に眼前に在り。然れば則ち大唐に例を残し、吾朝に證を顕わす。汝、疑ふことなかれ。〔立正安国論〕二一八〜二一九頁〕

ここでは、東アジア地図を広げ、歴史を語り、現今の状況に説き及ぶという論議を展開しているわけであります。今日のことばで言えば、『立正安国論』はある時代の東アジアの歴史状況、政治状態の中で、日本はどのような進むべきかを問題にした、と言つてもよろしいのではないかと思つておられます。

その結果として、『立正安国論』の、

葉師經の七難の内、五難たちまちに起こり、二難なお残せり。いわゆる他国侵逼の難・自界叛逆の難なり。

(定本二二五)

という、いわゆる予言が発せられるわけでありませう。

この予言については、

日蓮自身は当時の国際状況を精密に調べて、それで合理的に推理したのではなくて、彼の読んだ種々の經典

のなかに正教しやうきやうを信じないとこうなると書いてあるの

で、その通りに言っただけです。宗教的な予言者であ

って、合理的な予言者ではないと思ふのです。(海音寺

潮五郎述『歴史よもやま話上』文春文庫版一八七頁)

と論ずるむきもあるのですが、私は宗祖の予言というも

のは、ただやみくもに発せられたとは思わないのであり

ます。

今日のごとく、国際状況について綿密に知り得る時代

にあつても、分析判断については誤まることが多いわけ

です。たとえば、昭和十四年独ソ不可侵条約の締結を知

った平沼内閣が、「欧州状況は複雑怪奇」と声明し、総辞

職した事件、また、つい先ごろのイランのパーレビ体制

の崩壊によって三井石油化学が膨大な損失をこうむったことなど、枚挙にいとまがないのであります。

さて、宗祖がものごとを考える時には、天台大師の『摩

訶止観』がしばしばかえりみられていたのでありますが、

さきほどの『立正安国論』にも、宗祖は『摩訶止観』の

第二を引用されておりました。その引用の直前に興味深

い一節がありますので述べさせていただきます。

これは、淮わい河の北方に大乘の空を行ずる者がいたが、

天台大師のその一党に対する批判であります。

(この修業者たちは)この事は実なりといつて余は妄

語なりとなし、持戒修善の者を笑つて、謂つて道にあ

らずといひ、純もつぱら諸人に教えてあまねく衆もろもろの悪を造ら

しむ。……(中略)……その所説を聞くに、その欲情

に順ずれば、みな信伏随従し、禁戒を放捨し、非とし

て造らざることなく、罪積んで山岳のごとく、ついに

反せい姓をしてこれを忽ゆるがせにすること草のごとくならしむ。

国王大臣によつて仏法を滅ぼす。毒氣深く入りていま

にしていまだ改まらず。(岩波本上一一〇頁)

このような天台の記述が、法然浄土教の流布について、

宗祖に深い危惧の念を与えたことはまちがいないように思うのであります。

また、余談になりますが、宗祖の教学における教祖の重視は、教学の歴史的発展を重んじ、『顕仏未来記』のいわゆる「三国四師」(定本七四三頁)という系譜も生れたと思います。さらに、上行自覚ということも、法華経の未来記の歴史の実現であるという観点から把えるならば、まことに歴史主義的であるといえるのではないでしょうか。

三には、宗祖の世界観、心と世界との関係をどのようにお考えになつていられたかについて述べたいと思うのです。

先ほど『立正安国論』において、災害の続出する原因は何か、という問いに対して、

世みな正に背き、人ごとごとく悪に帰す。故に善神国を捨てて相去り、聖人とを辞して還らず。これをもつて魔来り、鬼来り、災い起こり、難起こる。(定本

二〇九～二一〇頁)

と、答えの与えられたことを述べました。実は、この一

節に『立正安国論』の思想としての骨格が明確に示されているのであります。この論理は、実は現在の解説書などでは肯定的には論じられないのであります。

現代からすれば、天災地変は自然現象であつて、まちがった思想や理念が影響して天災地変がおきたとの考へは、きわめて非科学的であり、また經典のみならず当時の一般書にも、日蝕や月蝕のごときものまで、不吉な現象として災厄の中に数えいれられていることは前近代的もはなほだしいといわねばならない。(田村芳朗著『日蓮—殉教の如来使』四三～四四頁)

引用の経文にみるように、仏教のなかにかかる考え方があつたことを、諸経は示しているのである。さまざま自然現象や社会現象の奥に、それをそうさせているもののあること、そして、そうさせているものを、まさにそうさせているのは、人の心であるとするのは中世人の思惟の特色の一つである。このことを前提としなければ『立正安国論』は理解できないであろう。

(高木豊著『日蓮—その思想と行動』六六頁)

しかし、私どもにとっては、宗祖の示されたこのお考

えをどのように受けとるべきかは、前近代的である、非科学的である、中世的思惟であるとして片付けられる性格のものではありません。また合理的とのみ受けとれる部分を理解して、それで事おわりとするわけにもいかならぬと思います。なぜかというならば、これは仏教の根本に関わってくる問題だと思ふからであります。あるいは近代の意味を問うことになります。そして、この宗祖の世界観について論じ合うことが、そのまま今回のテーマであるところの、まさに現代における「社会・人心の浄化運動」という問題へと関わってくるのではなからうかと私は思うのであります。

宗祖最初の著述とされる『戒体即身成仏義』に、小乗の戒体について述べた一節があります。

提謂経の文を見るに、人間の五根・五蔵・五体は五戒より生ずと見えたり。乃至、依報の国土の五方・五行・五味・五星みな四戒より生ずと説けり。止観弘法に委く引かれたり。……(中略)……されば我等が見るところの山河・大海・大地・草木・国土は、五根十指の尽形寿の五戒にてまうけ(儲)たり。五戒破れば此国

土次第に衰へ、又重ねて五戒を持たずして此身の上にも悪業作れば、五戒の戒体破失して三途に入るべし。(定本三〇四頁)

これは、衆生の業因によつて世界が生成変化していくとする業感縁起論でしょうか。『種々御振舞御書』に「夫人人身をつくることは五戒の力による」(定本九八四頁)とあります。ここに述べられている「五戒破れば此国土次第に衰へ」云云の一節に注意し、それを、『立正安国論』の「此の世早く衰へ、其法何ぞ廢れたるや」(定本二〇九頁)の文章に重ねあわせると、宗祖が災害に対しての解決を、信仰の姿勢を正すことに求められたのは、ごく自然のことに思えるのであります。『華嚴経』の法界唯心説にせよ、あるいは阿羅耶識縁起説にせよ、こうした仏教的心惟の基礎に立てば、『立正安国論』の宗祖のお考えというものは当然生れてくるものと、私は思います。宗祖はこうした仏教の世界観にのつとつて、『立正安国論』を立てられたのであります。こうした世界観を無視したならば、『立正安国論』第九番問答の結文、

汝、早く信仰の寸心を改ためて、速かに実乗の一善に

帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり。(定本二二六頁)  
の一節は、優陀那日輝和尚にならえば、「全く立論の無実」  
なることになってしまふであります。

古来やかましい台当の異目ということはひとまず措き  
まして、『立正安国論』のさきほどの重要な一節は、当然  
のことながら天台大師の『摩訶止観』が基礎にあると思  
うのであります。

一切世間の中に心によつて造らざるはなし。(岩波本上  
二七七頁)

界内外の一切の陰入はみな心に由つて起こる。……(中  
略)……心はこれ惑の本なり、その義かくのごとし。  
もし観察せんと欲せばすべからくその根を伐り、病に  
灸するに穴を得るがごとくすべし。いままさに丈を去  
つて尺に就き尺を去つて寸に就き、色等の四陰を置い  
てただ識陰を觀すべし。識陰とは心これなり。(岩波本  
上二七八頁)

こうして、このあと観不思議境の説明に入るのでありま  
す。

この一節を読みますと、『立正安国論』のいわゆる「信

仰の寸心」という語が単なる熟字であるにとどまらない  
ことがわかると思ふのであります。丈尺を去つて寸に就  
くがごとく、そのように一切の根本である心の信ずると  
ころを改めよ、という主張の意図が、『摩訶止観』の此一  
節を対照するとき、より明確になると思ふのであります。  
単に心を觀察するのではなく、心の信ずるところを問題  
としたところに、天台大師とは異なつた宗祖の数学の核  
心があると思ふのですが、しかし、心は一切法の本であ  
るという世界観は、『立正安国論』の災害に対する考え方  
の基本であるのみならず、「然れば則ち三界は皆仏国な  
り」の仏国土観を理解する上で、無視できないものであ  
ると思ひます。

以上、『立正安国論』とは何かについて、甚だ取りとめ  
のない内容ですが、宗祖の政治に対するお考え、歴史へ  
の洞察、あるいは世界観といった三点によつて述べさせ  
ていただいたわけであります。

### 三、『立正安国論』から現代を視る

ここで、『立正安国論』を中心とする宗祖のお考えを要

約いたしますなら、宗教が政治・社会の根本にあつて、それらを正しく統御することによって、正常な社会の展開はありうる、ということになるのではないのでしょうか。飛やくするようではありますが、私どもの礼拝帰依の対象である大曼荼羅は、このような意味をもっているとも言えると思うのであります。

大曼荼羅は、妙法蓮華經の真理が宇宙に遍満していることを示されたものでありましょう。『立正安国論』の「実乗の一善に帰依するとは南無妙法蓮華經、然れば則ち三界は皆仏国也」とは真理が法界に充満している曼荼羅そのものではないでしょうか。妙法蓮華經があらゆる存在の世界、あらゆる歴史と空間に一貫して遍満していることを、大曼荼羅は見事に示しているのであります。ここには、宗祖の政治観・歴史観・世界観が集約されているといえると思うのであります。浄化された社会・人心の姿も、また、ここにあらわされていると思うのであり、宗祖は「日本国に第一に富めるもの日蓮一人なるべし」(『開目抄』五八九頁)という意味のことを仰せられました。が、私どもも、信仰によって、この浄福の世界を共有す

ることができると思うのであります。

かつて、宗祖の浄土観に三種あるということが指適されました。「ある浄土」「なる浄土」「いく浄土」の三つであります。「三界は皆仏国也」というように、信仰者に現前する浄土が、いわゆる「ある浄土」であります。この浄土観はしばしば観念的である、現実の姿を陰べいするものである、といって批判されてきました。今の多くの人たちに、こうした考えが強いであろうと思うのであります。たしかに、現実の悲惨さの前では、宗教者もことばを失ないがちになります。しかし、また、幸福の条件を一つずつ積み重ねていけば、それで幸福感は増大するのであるうか、という疑問も残ります。これは安易に比較できない問題であります。

この安易に比較できない問題、一つの矛盾、そこより生ずる苦悩、こうしたものが、私は『立正安国論』には流れている、奥底にひそんでいると感じるのであります。たとえば、『立正安国論』第七番問答に、

夫れ、国は法に依て昌へ、法は人に因つて貴とし。国亡び人滅せば、仏を誰か崇むべき。法を誰か信ずべき

や。先ず国家を祈りて須らく仏法を立つべし。(定本二二〇頁)

という一節がございます。

このなかの「先づ国家を祈りて」云云が宗祖のお考えであるとしたならば、あまりにも一面的な、いわゆる国家主義者に宗祖を仕立ててしまうことになるではありません。ともかく、国家主義とか民主主義ということばのない時代のことです。都合のよい時代風潮に見合った解釈をすることは避けなければなりません。しかし、この一節の中の「国亡び人滅せば仏を誰か崇むべき」云云のお考えが宗祖にはなかつたとはいえないと思ふのであります。

それと申しますのも、第九番問答の答文に、周知のごとく、「汝、早く信仰の寸心を改ためて」云云の一節がございますが、その同じ答文に、次の一節も、また、あるのです。

而るに他方の賊来りて其の国を侵逼し、自界叛逆してその地を掠領せば、豈に驚ろかざらんや。豈に騒がざらんや。国を失ない家を滅せば何れの所に世を遁れん。

汝、須らく一身の安堵を思はば、先ず四表の静謐を祈るもの歟。(定本二二五頁)

この一節は、「汝、早く信仰の寸心を改めて」云云の一節を比べると、同じ答文にありながら、対照的な論理をもっているように思えるのです。前者を観念的・理想的・宗教的であるとするならば、後者は具体的・現実的・世俗的な主張であるということができましょう。この主張のどちらが正しいのか、というよりも、私は、このような矛盾葛藤が宗祖の心の中に在ったと思ふのであります。「摂受・折伏時に依るべし」(『佐渡御書』六一一頁)というお言葉もありますように、こうした二極的な物の見方というものを、私どもが現代を視るとき、持つべきであらうと思ふのであります。現代のかかえている複雑な問題、たとえば、安全保障か福祉かという問題に対処しようとする時、大事なことはなからうかと思ひます。つぎに、宗祖は、

仏法を学せん法は必ず先ず時をならうべし。

あるいは、

仏法を修行せんには時をたださざるべしや。(『撰時抄』)

と述べられ、時代を知ることの大事であることを強調せられました。私は祖滅七百年を経た今日、そのことがますます大事になったことを感じるのであります。

世間的にも、時代論が非常に盛んであります。ちよつと調べてみましても、アーノルド・トインビーの「現代が受けている挑戦」、ケネス・ボールドイングの「二十世紀の意味」、アルビン・トフラーの「未来の衝激」等々とあります。これらの書物に共通した認識というのは、現代は大変革期・大転換期であるということです。現代に比較しうる変化は、かつて未開時代から文明時代へと移つた原因をなす農業文化の勃興ぐらゐであらうというのであります。現代の変化の速さを示すものとしていろいろなデータをあげていますが、身近なものでいくと経済成長率があります。日本の成長率は5%であるとか7%であるとかいわれますが、この一年間に5%という数字がいかに大きいものであるかは、例えば、フランスでは、一九一〇年から、第二次世界大戦勃発までの二十九年間に工業生産の増加はわずか5%であつたことと比べると、

よくわかるというのです。私どもには、5%の成長率というと、別にたいしたことがないように思えます。しかし、今世紀の初期には、そのためには二十年も三十年もかかつたということですから、見方を変えれば、現代の一年の変化は古い時代の数十年に匹敵するということであります。

宗祖の御手紙に「青兎せいぶ五貫文送り給ひ了んぬ。唱へ奉つる南無妙法蓮華經。一返の事。恐々。」(『兵衛志殿御返書』一三四五頁)という短かいものがございます。この一貫文とは米にして約一石(二石し十斗、二斗し二万円)。現在の米価に直すと約五万円です。五貫文で二十五万円になるそうであります。ところが、この二十五万円を得るためには、二、三町歩の田地を耕作し、收穫高(現在、一反し三石し十五万円、三町歩し十五万×三十反し四五〇万円)から年貢をさし引いて、初めて手にする額であるということですから(『歴史よもやま話』参照、並み大抵の結果ではありません。弘安四年に身延山に出来た十間四面の大坊のことを、「坊は鎌倉にては一十貫にても大事とこそ申し候へ」(『地引御書』一八九五頁)と、宗祖が感謝のこぼ

を述べておられますが、大変な事業であったことが類推されるのであります。

さて、今回の七百遠忌記念に全国の寺院で行なった事業総額が八百億円と聞きます。過去を比べると、天文学的数字であります。しかし、軍事費と比較すると、それは実に僅少な額となります。フォークランド紛争に出動したイギリス空母「ハミーズ」の建造費は一千億円であるといわれているからです。また、今回の教研会議の費用は一人一万三千円ですが、アジアのある国の一人の年平均所得がわずか一万円ほどのところもあると聞いております。

煩しさをいとわず、数字をあげましたが、現代における想像を絶した加速度的変化、技術革新に支えられた経済発展が、核戦争・エネルギー危機・環境悪化・食糧問題・南北問題・人口問題などの種々の社会問題を我々にもたらせていることでもあります。

宗祖は『立正安国論』で三災七難の続発をあげておられますが、現代の状況は、まさに、それと重なり合うものです。宗祖は、

衆生の貪・瞋・癡の心のかしこきこと、大覚世尊の  
善にかしこきがごとし。……(中略)……譬へば火(悪)  
をば水(善)をもつて消す。悪をば善をもつて打つ。  
しかるにかへりて水より出でぬ火をば、水をかくれば  
油になりて、いよいよ大火となるなり。(『智慧亡国御書』  
一一二九頁)

と、鋭い意見を述べておられますが、これは、今日の文明の構造、宗教を含めた社会の在り方への洞察ともなりうると思うのであります。

宗祖は、『立正安国論』において、三災七難の原因は宗教とそれを信ずる人の心にあると主張されました。そのことを、現代の核戦争の危機が核分劣反応の人工的発生という、現在の経済的発展を支える文明の頂点のなせる結果であることを考える時、『立正安国論』は実に暗示に富むものと言えます。

結局、こうした現代の状況の中で、何が遅れているかといえ、人々の心の浄化であると言わなければなりません。浄化と申ししても、宗祖も、これをば知らずして、今の人々善根を修すすれば、いよ

いよ代よのほろぶる事出来せり。(『智慧亡国御書』一一二九頁)

と述べられてますように、人々の信ずるところの根本的変革をなさなければ、意味をなさない。お金は欲しい、樂はしたい、生活程度はもっと上昇しなければいかん、公害はいかんというのではないと思うのであります。これは、『立正安国論』を教団の出発点とする私ども日蓮宗僧俗のなすべき使命であると考えるのです。

戦後復興し、外形的には発展したかにみえる我教団であります。その原因の一つは日本の経済力の発展に負っていると思うのであります。その勢いに乗ったという面があると思うのであります。そして、日本の経済は、貿易を通じて、東南アジアをはじめとする世界各国の経済の上に成り立っているのであります。しかし、あの雑誌を読みますと、「非常に東南アジアにおける日本人の態度が悪い。商社の人なんかは、黄色い顔をしたアメリカ人が来た、と言われていた。日本人の根性は直つてないから、日本が軍事力を増強させたら、また、アジアに攻めこむにちがいない」と記してあります。

宗祖は、

汝、須らく一身の安堵を思はば、先ず四表の静謐を祈るものか。(『立正安国論』一二二五頁)

と教えております。

これは、今後の日蓮教団の国内における人々の心の淨化運動の課題であると同時に、海外布教への強い促しと、その姿勢はいかにあるべきかを、宗祖が示唆されたものと受取りたいと思うのであります。

本稿は、第六回中四国教区教化研究会議にて発題したものです。遺文は『昭和定本日蓮聖人遺文』を使用した。